装着ロボ 腕、脚リハビリ手助け

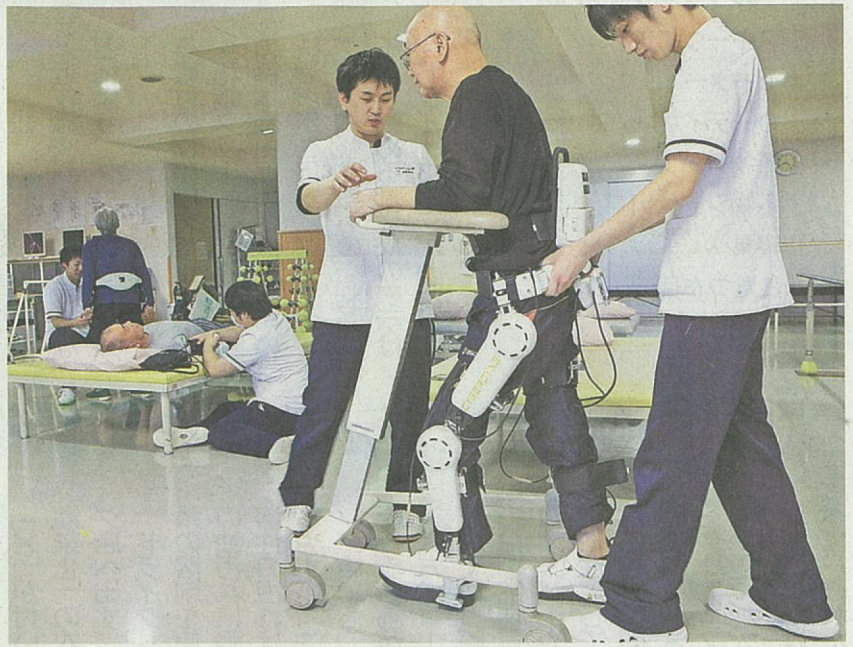
孝仁会運営 釧路の２病院

「回復早まる傾向」

いきいき釧根

社会医療法人孝仁会（釧路市）が脳疾患や脊髄損傷の患者のリハビリに装着型ロボットを取り入れている。身体を動かす時に脳が筋肉に送る信号をセンサーで感知し、モーターなどで腕や脚の動きを手助けする仕組み。自分の意思で体を動かす感覚を取り戻しやすいのが特徴。歩行器などと同じリハビリ器具の位置付けで、孝仁会は患者に対するサービスの一環として導入を進めている。

（佐竹直子）



ＨＡＬを装着し、歩行訓練に励む患者＝星が浦病院

孝仁会が運営する星が浦病院（釧路市星が浦大通３）と釧路孝仁会記念病院（同愛国）は、２０１５年度にリハビリロボットを導入した。膝や肘の動きを助ける関節用ロボットや電気の刺激で手の筋肉を収縮させ「つかむ、手放す」といった動きを支援するものなど、両病院合わせて７種計16台がある。

下肢用ロボット「ＨＡＬ（ハル）」は道東では両病院だけで使われている。患者の太ももなど10カ所にセンサーを付け、脳の脚を動かそうとする信号を感知すると、モーターが作動し、両脚の動きを補助する。

星が浦病院で毎日、歩行訓練に励む朝倉房雄さん（68）は昨年12月に脳梗塞を発症。右半身にまひが残っているが、ＨＡＬの装着によって「自力で歩く感覚が戻ってきました」と話す。

孝仁会が導入している装着型ロボットは医療保険の適用対象外だが、リハビリ用の器具としての利用のため患者の負担は増えず、これまでと変わらないという。

「従来のリハビリに装着型ロボットを組み合わせると、回復が早まる傾向にある。患者のニーズに応えるための投資」と山田勝雄・リハビリテーション統括部長は話す。孝仁会は２０１７年度も腕の機能回復を補助する新しい装着型ロボットを導入する予定だ。